

違和感と distant reading

堀 正広

I. 英語学文体論の視点からの英米文学作品の読みの定義

「英語の読み」とは、「違和感」を感じ取る力である。そして、その「違和感」を文学的な、あるいは社会的、文化的な解釈と関連付けることができる力である。

II. 様々な違和感

1. 言語的逸脱による違和感

(1) 文法的・書記法的逸脱を読み取り解釈する力

引用(A)は *Huckleberry Finn* の書き出しである。太字は文法的・書記法的逸脱である。しかし、このような逸脱した言葉遣いはこの作品の味わいである。この作品のリトルド版(B)では英語の違和感が失われ、原作の語り口が生み出す、何が本当のことで、何が本当でないのか、という語りの揺らぎが消え、口語表現を文学として確立させたこの作品の核が失われる。

(A) You don't know about me, **without you have read a book by the name of *The Adventures of Tom Sawyer***, but that **ain't no matter**. That book **was made** by Mr. Mark Twain, and he told the truth, mainly. **There was things** which he stretched, but mainly he told the truth. **That is nothing**. I **never seen** anybody **but** lied, one time or another, **without it was Aunt Polly, or the widow, or maybe Mary**.

(B) You don't know me if you haven't read *The Adventures of Tom Sawyer*. Mr. Mark Twain wrote that book, and most of it was true. Some things weren't exactly true, but everybody lies sometimes. May not Tom's Aunt Polly or the Widow Douglas, though. They were in that other book. (Penguin Readers Level 3, 1200 headwords, *Pre-intermediate*)

(2) 意味的逸脱を読み取り解釈する力

例は、*Romeo & Juliet* からの矛盾語法。(A)は Romeo で、(B)は、Juliet のもの。Romeo の場合は、言葉の字義的な意味による過度の類型的な直截的な矛盾語法。一方、Juliet は、言葉の連想による間接的な矛盾による語法。二人の矛盾語法には、愛憎の両面の個人的感情の情緒に浸り、溺れる Romeo と愛情と現実の相克に悶える Juliet との違いがはっきりと現れている。

(A) Why, then, O **brawling love!** O
loving hate!
O **any thing, of nothing first created!**
O **heavy lightness! serious vanity!**
Misshapen chaos of well-seeming
forms!
Feather of lead, bright smoke, cold
fire, sick health!

(B) **Beautiful tyrant! fiend angelical!**
Dove-feather'd raven! wolvisish-ravening
lamb!
Despised substance of divinest show!
Just opposite to what thou justly
seem'st,
A damned saint, an honourable villain!

(3) 語法・コロケーションによる逸脱を読み取り解釈する力

引用(A)は *A Christmas Carol* の書き出しで、太字は違和感を与える表現である。ここでは、particularly dead を考える。これを 8 世紀から現代までの文学作品のデータベースである Literature Online で調べると、この作品だけでしか使われていない。このような英語の不自然さや奇妙さがこの作品のトーンを形作っている。エンディング(B)の違和感のない英語と比較すると、不自然な世界から神に導かれた喜びの世界への覚醒というテーマが浮き上がる。

(A) **Old Marley was as dead as a door-nail.**

Mind! I don't mean to say that I know, of my own knowledge, what there is **particularly dead** about a door-nail. I might have been inclined, myself, to regard a coffin-nail as **the deadest piece** of ironmongery in the trade. (*A Christmas Carol* by Dickens)

(B) He had no further intercourse with Spirits, but lived upon the Total Abstinence Principle, ever afterwards; and it was always said of him, that he knew how to keep Christmas well, if any man alive possessed the knowledge. May that be truly said of us, and all of us! And so, as Tiny Tim observed, God Bless Us, Every One!

2. 言語使用の不自然さによる違和感

(1) 会話における「協調の原理」の逸脱を読み取り解釈する力

I said, "I think someone killed the dog."

"How old are you?" he asked.

I replied, "I am 15years and 3months and 2days."

(*The Curious Incident of the Dog in the Night-time* (2003) by Mark Haddon)

上記の引用の英語表現には違和感はない。しかし、その使い方に微妙な違和感を感じる。警官の質問に対する主人公の返事“I am 15years and 3months and 2days.”は、会話の協調の原理「相手の要求に見合うだけの情報量を与えなさい」に違反している。必要以上の情報量を与え、円滑なコミュニケーションを阻害している。このような言語使用の不自然さを読み解く「読み」も重要である。因みに主人公は、自閉症であることが暗示されている。

(2) 書き出しにおける違和感を読み取り解釈する力

主人公エマの描写は、seemed を境に前半と後半では微妙な違和感を感じる。前半は明快で断定的。後半は断定を和らげる緩叙語 nearly, very little や疎遠語 seemed, some によって歯切れが悪い。この一文には、主人公エマに対するアイロニーと作品のテーマが暗示されている。

Emma Woodhouse, handsome, clever, and rich, with a comfortable home and happy disposition, seemed to unite some of the best blessings of existence; and had lived nearly twenty-one years in the world with very little to distress or vex her. (*Emma* by Austen)

III. distant reading

close reading に対する distant reading は、digital humanities の発展によって提案された「読み」である。本論では distant reading を“a computational approach to texts”と定義し、「英語の読み」について次の2点を指摘する。「1. 英語の読みの裏付け、2. 新しい読みの可能性」。

1. 英語の読みの裏付け

II.1.(3)の“particularly dead”が通常のコロケーションではないことは、データベース Literature Online を使って確認できた。同様に、ある単語や表現がその作家固有の創造か否かの調査には、このデータベースは有益である。また、文学作品のコーパスを作成して様態副詞の頻度の時代的な変化を知ることができる。たとえば、18世紀から20世紀における様態副詞の頻度に関しては、増加していく様態副詞として thoughtfully, slowly, quietly, gently 等。使用頻度が減少していく様態副詞としては、tenderly, heartily, earnestly 等がある。これらのデータは、ある作家の副詞の使用を分析する際に、歴史的な視点からの裏付けに有益である。

2. 新しい読みの可能性

Anne of Green Gables ではアンは気の強い男の子のような女の子として描かれている。言葉の面では強意副詞の使用にみられるように、きわめて女性的特徴を持った人物である。たとえば強意副詞 extremely は、12回すべてアンによって使われている。また、divinely, dazzlingly, angelically も強意語として使われている。他の強意副詞においても他の人物より多用している。コンコーダンサーを使って、アンが強意副詞の面からアン的人物を解釈することができる。

very の1万語当たりの頻度を18世紀と19世紀の代表的な作家19名の142の小説を調査すると、頻度が高い10作品の内、オースティンは5作品が入っている。また、British National Corpus のフィクションのコーパスと比較すると、『エマ』は約8倍以上の使用である。なぜveryは、オースティンの作品では頻度が高いのか、『エマ』においてはなぜ際だっているのか。

定冠詞 the の使用において、BNC の話し言葉では、女性に比べて、男性の頻度が高いことが指摘されている。文学作品においては、遥かに大きな使用頻度の差が見られる。たとえば、Romeo や Hamlet は、Juliet や Ophelia よりも the の使用頻度が高い。また、Hemingway の短編“Hills Like White Elephants”では女性の定冠詞の使用は男性の半分以下である。このような機能語の調査は、文学作品の新たな読みの可能性を提示する。

参考文献

Hori, M. (2004) *Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis*, Palgrave Macmillan.

堀正広 (2019) 『はじめての英語文体論 英語の流儀を学ぶ』大修館.

Leech, G. (1969) *A Linguistic Guide to English Poetry*. Longman.

Widdowson, H. G. (1975) *Stylistics and the Teaching of Literature*. Longman.